

資本主義の発展と『資本論』の「読まれ方」

小幡道昭

2017年9月16日

目次

第1節	『資本論』と「経済原論」	
第2節	『資本論』 元年	1867年
第3節	『資本論』 50年	1917年
第4節	『資本論』 100年	1967年
第5節	『資本論』 150年	2017年

第1節 『資本論』と「経済原論」

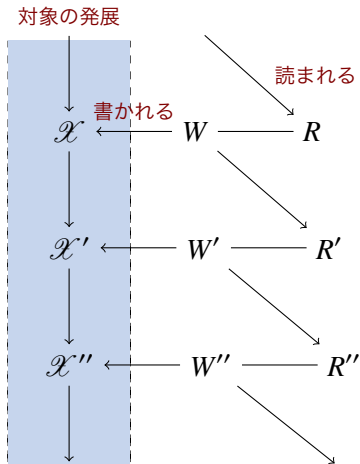
『資本論』前50年

スチュアート	『経済学原理』	1767年
リカード	『経済学および課税の原理』初版	1817年
マルクス	『資本論』第1巻初版	1867年
レーニン	『帝国主義論』	1917年

『資本論』を「経済原論」として読む

- 「原理」とは：用語を明確に定義し、単純な仮定から一般的な法則を導出する演繹的体系
- マルクスによる、リカード『原理』の「読まれ方」
 - 1 対象のもつ**歴史性**：構造変化を繰り返す対象を、演繹型理論で考察できるか。
 - 2 演繹理論に隠された**イデオロギー性**：体系の単一性と対象の理念化
- しかし、マルクスの古典派「経済学批判」は「**反経済学**」ではなかった。リカード『原理』批判はけっして「**脱原理論**」ではなかった。
- 「原理で原理を批判」することの困難
- どんなに自己の限界を自覚したとしても、自覚だけでは乗り越えられない**時代的制約**
- 『資本論』は、資本主義のイデオロギー性と歴史性を批判的に解明する原論であると同時に、特定の歴史性と独自のイデオロギー性が刻まれた原論

「読まれ方」を読む



『資本論』 150年の「読まれ方」を客観的に読む必要がある。

第2節 『資本論』元年

『資本論』の刊行過程

1867	第1巻	ドイツ語 初版	DK 1
1872	第1巻	ドイツ語 2版	DK 6
	第1巻	フランス語版	
	第1巻	ロシア語版	
1885	第2巻	ドイツ語版	DK 19
	第2巻	ロシア語版	
1887	第1巻	英語版	DK 21
1894	第3巻	ドイツ語版	DK 28
1896	第3巻	ロシア語版	DK 30

- 1 第一巻完結型の読まれ方をされた
- 2 内容はイギリス資本主義なのに、読者層はドイツ語圏、フランス語圏、そして意図せざる結果としてロシア語圏

第一巻完結型

前半体系	搾取論	プルドン型	市場社会主義批判	フランス語圏
後半体系	崩壊論	ラッサール型	議会改良主義批判	ドイツ語圏

ロシア語圏では

- 搾取論 → 「市場の廃絶」 = 「計画経済」論
 - 崩壊論 → 「議会参加型改良主義の困難」 = 「政治革命」論
- に結晶していった。

第3節 『資本論』 50年

帝国主義論世代

ベルンシュタイン	1850 - 1932
カウツキー	1854 - 1938
レーニン	1870 - 1924
ローザルクセンブルグ	1871 - 1919
ヒルファールディング	1877 - 1941

- 1 50年代生まれの「修正主義論争世代」が定着させた第一巻完結型の「読まれ方」から抜けだせなかったが、
- 2 資本主義が大きく変わったという歴史的事実は、はっきりと認識

19世紀の「マルクス主義」は、「マルクス＝レーニン主義」となることで、はじめて20世紀の歴史を動かした。

第4節 『資本論』 100年

日本における「読まれ方」

1920	高島素之 訳	『資本論』	第1巻 → 第3巻 → 第2巻
1924	青野季吉 訳	『帝国主義論』	
1927	林 要 訳	『金融資本論』	
1928	河上肇 著	『経済学大綱』	

- 1 はじめから全三巻がセットで読まれた点
- 2 『帝国主義論』や『金融資本』と同時並行的に読まれた点

- これによって第一巻完結型の自己崩壊論にかわって、資本の競争を通じて社会的再生産が編成処理できるという資本主義の自立性論が浮上。
- この自立的な原理像に対して、『帝国主義論』の発展段階をどう位置づけたらよいのか、という問題も浮上。

『資本論』三巻体系と金融資本論

全三巻セットで読めても....

従来『資本論』の解説書としては、カウツキーのもの¹が広く行われてゐるけれども、あれは第一巻の内容を主としたもので、第二巻、第三巻の内容については僅かな追加が試みられてゐるに過ぎない。私の著作は『資本論』の**全三巻に亘る内容**をほぼ平均的に紹介しており、且つマルクスの研究法および叙述法を出来るかぎり尊重してゐる点において、善かれ悪しかれ、まだ**世界にその類本がない**²と考へてゐる。(1928年『河上肇全集』15, 494頁)

崩壊論の軛から脱するのは容易でない。

吾々は、以上の各章において常に**自由競争を前提**してゐた。しかしながら資本家的生産の最高の発展階段においては、自由競争はその反対物たる**独占に転化**する。それと同時に、金融資本なる新たなる種類の資本が現はれ、それが支配的勢力を有つことになる。今吾々が本章において研究せんとするところは、かかる資本主義最後の階段における諸情勢である。(同 452頁)

¹高畠素之訳『資本論解説』売文社, 1919年

²David I. Rozenberg『資本論注解』1931-1933年の直井武夫・淡徳三郎訳が、改造社から1933年にでてゐる。

全三巻をセットで読む

- 体系化：「流通論」の分離から → 「流通論」「生産論」「分配論」の三篇構成へ
- 『帝国主義論』の処理
 - 1 追加型・接木型：資本主義的蓄積 → 集中・集積 → 独占 → 金融資本という時系列ではなく、
 - 2 切断型・重合型：共時的な関係において「現象」に対する「本質」と読むことで、

全三巻ベースで自立した資本主義像を読みとることは可能。

『資本論』全三巻をセットで読むということは、同時に『帝国主義論』とセットで読むということでもある。『帝国主義論』がセットとしてあるから、はじめて『資本論』全三巻を資本主義の自立性論として読むことができる。

『資本論』の篇別構成

I 資本の生産過程

- 1 商品と貨幣
- 2 資本への転化
- 3 絶対的剰余価値
- 4 相対的剰余価値
- 5 絶対的相対的...
- 6 労賃
- 7 資本の蓄積過程

II 資本の流通過程

- 1 変態と循環
- 2 資本の回転
- 3 再生産

III 総過程

- 1 利潤への転化
- 2 平均利潤への転化
- 3 傾向的低下法則
- 4 商品・貨幣取引資本
- 5 利子生み資本
- 6 地代
- 7 諸収入

経済原論の「はじめ方」と「終わり方」

河上肇『経済学大綱』1928年

- 1 **商品と貨幣**
- 2 資本の生産過程
 - 第3章 貨幣の**資本**への転形
- 3 資本の流通過程
- 4 総過程
- ...
- 第16章 **金融資本**

宇野弘蔵「経済原論」講義 1936年

- 1 **流通論**
 - 1 商品
 - 2 貨幣
 - 3 **資本**
- 2 生産論
- 3 分配論

帝国主義段階（『経済政策論』）
 重商主義段階 → 自由主義段階 →

宇野理論

- 『資本論』と『帝国主義論』を結びつけるキーワードは「**不純化**」
 - 1 ある時期までは『資本論』全三巻をベースに演繹的に構築された「**純粹資本主義**」に接近する「**純粹化の傾向**」が認められるが、
 - 2 19世紀末に後発の資本主義が台頭するなかで、この傾向は鈍化、逆転するようになった

というテーゼ

- 第一巻完結型が、「**純粹な資本主義なら矛盾が累積して内部崩壊する**」というのに対して、
- 「**純粹な資本主義ならどこまでも自立的に発展してゆけるはずだが、現実の資本主義がそこから離れてしまったところに、資本主義の歴史的限界が現れている**」という裏返しの主張
- このラディカルな主張は、戦後長い間、異端視されてきたが、『資本論』100年のころから、日本のマルクス経済学研究の表舞台にたつことを許されるようになった。

第5節 『資本論』 150年

独占資本主義論・市民社会派・宇野理論

独占資本主義論

『資本論』は自由主義段階の競争的資本主義の原理 → いつまでもそれに拘る必要はない。
『資本論』レベルの理論研究から徐々に離れてゆく。「大戦後資本主義は、資本主義経済一般の基本法則を解明したK. マルクス『資本論』のような理論体系化は不可能である。」

市民社会派

日本資本主義の後進性を、戦前の封建遺制から、戦後の「市民社会」の不在に置き換え、「市民社会」の確立というかたちで、ソ連型社会主義と一線を画す新たな社会主義社会を標榜。ユーロ Kommunismus との接近：フランスのレギュラシオン学派を高く評価：理論のベースも『資本論』からケインズ経済学的マクロ理論、ポストケインズ派経済学にシフト。

宇野理論

新たに全三巻ベースで「純粋資本主義」を構築することが喫緊の課題。高度成長期から福祉国家型資本主義の時代まで、一貫して不純化＝「帝国主義段階」として再規定する方向で、原理論の抽象度を高めてゆく。

プレートの変換

- 20世紀末における新たな新興資本主義の勃興 ≡ グローバリズムの底流
 - 1 20世紀の「マルクス・レーニン主義」の終焉
 - 2 福祉国家型から新自由主義へ
- 資本主義の生成・発展・没落という三段階の発展段階論の延長では捉えられない圏外へ
- 段階論を再構成するには、その基底をなす純粋資本主義論型の原理論の再構築が不可避

純粋資本主義論の問題点

純粋資本主義論における『資本論』の「読まれ方」の最大の難点は、資本主義の自立性を**経済原論の内部に封じ込めてしまった点**にある。

ただし...

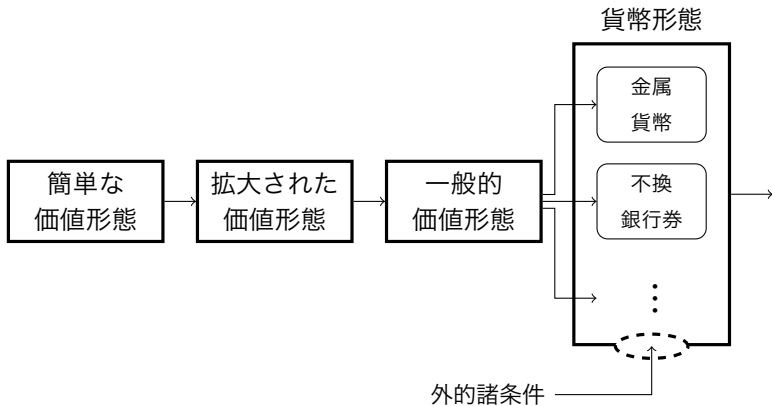
- 1 私は純粋資本主義論におけるのような「読まれ方」が不可能だといっているのではない。20世紀のプレートが支配しているなかでは、それは最善の「読まれ方」だった。
- 2 『資本論』の「体系的純化」というアプローチを否定しているのではない。商品経済の基礎をなす用語を明確に定義し、前提を明示して、演繹的推論を通じて体系を構成する方法を緩めることは原論の自殺行為である。
- 3 資本主義の自立性そのものを否定しているのではない。純粋資本主義を想定し、その内部で資本主義の自立性を説明するアプローチが問題なのだ。

変容論的アプローチ

では、どう読むべきなのか

- 1 課題は、『資本論』の（そして純粋資本主義の）**単一資本主義像**をこえること。
資本主義が、現実（あるいは理論上）に究極の、本来のすがたに行きつくという**収斂説**から脱却すること。
- 2 『資本論』に対して、純粋資本主義論以上に、**演繹的な論理をより徹底**して適用。
→ 商品経済的關係では特定できない「**開口部**」が理論平面に浮上。

価値形態論の開口部



変容論的アプローチ

では、どう読むべきなのか

- 1 課題は、『資本論』の（そして純粋資本主義の）**単一資本主義像**をこえること。
資本主義が、現実に（あるいは理論上は）究極の、本来のすがたに行きつくという**収斂説**から脱却すること。
- 2 『資本論』に対して、純粋資本主義論以上に、**演繹的な論理をより徹底**して適用。
→ 商品経済的關係では特定できない「**開口部**」が理論平面に浮上。
- 3 **複数の**「開口部」に**外的諸条件**が作用することで、資本主義は**多関節的に変容**。

資本主義の自立性は段階論レベルで

- たしかに、商品経済の論理は強力であり、資本主義の原理像は、**唯一この動力によってのみ**、演繹的に構成できる。別の第二、第三の動力が存在するわけではない。
- しかし、この強力な動力を以てしても、演繹だけでは一義的に説明できない**開口部**が存在する。
- こうした開口部を制度や慣習などの**外的諸条件**で埋めることで、資本主義は、歴史的な諸相をともなって、段階論のレベルで自立する。
- 『資本論』を三巻体系で読むことと、純粹資本主義論として読むことは別のことである。
- 資本主義の自立性は『資本論』を変容論的に読むことではじめて捉えうる。

空白の社会主義

- 資本主義の自立性を原論レベルに閉じ込めた純粋資本主義論は、商品経済の論理を全廃した**本来の社会主義**をネガとして内包。
- 原理論によってあらゆる社会の基礎をなす「経済原則」が全面的に**わかる**のだから、これを市場を介さずに直接意識的に実現**できる**という考え方。
- 変容論的な原理論をベースにすると、**本来の社会主義**という考え方はできなくなる。社会主義は、現実に存在する開口部の埋め方の問題。複数の開口部を埋める、コンシステントな社会的価値観＝イデオロギーとしての社会主義。つまり**空白の社会主義**。
- 新興資本主義国の台頭のもとで、旧先進資本主義諸国では新自由主義への外圧が高まる一方、これに対抗し資本主義からの離脱をもとめる内圧も高まっている。この離脱の運動を「社会主義」とよぶことに本来なんの問題もない。
- 必要なのは、多様な社会民主主義の流れのなかに身をおき、その宿痾である排外主義的性向をはっきり意識し克服してゆくこと。